

坂口安吾 『安吾の新日本地理 長崎 チャンポン』——九州の巻—— 試論

——原子爆弾になってしまった男の話、あるいは、
境界線と境界領域とをめぐって

秋山 康文

〈原子爆弾が殺した〉という、非人称を主語に立てた言い方は、例えば〈アメリカが原子爆弾を使って殺した〉というような言い方とは違って、その構文上、殺害を行った人間の存在を無化している、それゆえにこの構文上では、原子爆弾を落とした人間たちに対して責任を問うことができない。この構文では、加害者が非人称化されているのである。

永井隆が、原子爆弾が投下されて絶望に沈む人々に力を与えるためにつくったのであろう物語も、あるいは、原子爆弾による被害は日本がしてきたことに対する当然の報いであるという言い方も、ともに、この加害者の非人称化が前提となつてみるとみてよいであろうと思われる。

どちらの言説も、原子爆弾を〈神〉ないし〈天〉といった人間に対して超越して存在するモノ自身、もしくはその〈御技〉とみなすことによつて成り立っているのであるが、原子爆弾の投下者

であるアメリカ（の政府と国民）を〈神〉であるのだとまったくの疑心なくみなすことのできる者たちを除いては（そのような者たちの存在を私が知っている、ということではない。念のため）、〈神〉ならぬ身の〈人間〉が加害者の座にとどまったままでは、それを〈神〉と呼ぶことは不可能だからである。

かくて、原子爆弾をめぐる問題について、その言説の述定性に注目して、その言説の世界（含、主体）に対する構成力を考察しようとする場合においては、〈原子爆弾〉という言い方の（および〈原爆〉といったそれに類するものの）非人称性が、この問題における加害と被害の問題、あるいはそれに伴う責任の問題を考える際の、ひとつのキーとなる。

なるのだがしかし、ここでもし、そのように非人称性をまとうて登場することの多い〈原子爆弾〉というものに、なつてしまった男がいたとしたら、どうであろう。人称化される非人称、あるいは、非人称を生きる人間主体の登場である。

今回は、そんな男の話から、考え始めてみたいと思う。

坂口安吾『安吾の新日本地理 長崎チャンポン——九州の巻——』
『文藝春秋』昭和二六・八、以下、『長崎チャンポン』は、昭和二十六年の長崎への取材旅行のことのみではなく、昭和十六年の取材旅行の折りのことと原子爆弾が投下されたという知らせを聞いた時のことが振り返って書かれている。

私一人の特殊な感慨であるのかも知れないが、私は浦上の運命については感慨なきを得ないのである。

浦上は原子バクダンによつて世界的な名所となったが、こ

ういう異常な犠牲となる以前から、浦上は日本における最も特殊な村落の一つであった。私の十年前の旅行に於ても、浦上訪問は私の大きな関心事で、その土をふみ、農家の前に立つだけでも、なんとなく異様な思いが胸にさわぐのを押さえることができないような気持ちであった。

九州には隠れ切支丹が多かったが、そのうちで最も有名なのは浦上であった。(略) そんな根強い地下信仰の歴史もあって、諸方に隠れ切支丹があるうちで、浦上だけは特に一般に名を知られ、その代表のようなものだ。長崎市民は浦上切支丹を「クロ」とよんで白眼視していたものだ。「クロ」はクルス(十字架)からきたというが、本当かね。とにかく決して善意をこめて呼ぶ名ではないね。本来は隠れ切支丹をさして「クロ」とよぶということだが、しかし十年前に私が長崎の二三の市民にききた、だしたところでは、

「浦上がクロですと」

というような返事で、浦上の切支丹をクロとよぶものだと思得ていたようだった。異教徒から見れば、浦上は特別の切支丹地帯で、別人種的にも思えたかも知れん。私が十年前に浦上の土をふんだだけで、また、農家の内部をチラと見ただけで、何か胸に騒ぐ感慨を押さえたかかったのは、それもやっぱり異郷にさまよう妖しさが胸底にあつたせいであろう。

(略)

十年前に私が浦上の地をふんだとき、それは「火の消えたような」とでも申しましようか、私がそこに感じたのは孤絶した哀れさ、オドオドした悲しさでした。そのとき彼らは、

いつの時代よりも白眼視されていたのかも知れせんね。捕吏を敵とする時代はあったが、こんなに民衆を敵にした時代はなかったのではあるまいか。彼らが一切の上にはいたたく天にまします父は、日本の天にはなくて、西洋の頭上の天にまします。先祖代々日本の地上に住んではいても、彼らは日本の天の下には住んで居なくて、西洋の空の下に居り、つまり彼らは精神的な異人だというような白眼視であった。私に「クロ」という呼称の存在を教えてくれた長崎市民の一人は、明らかにそう考えていたようだったし、浦上の人家や山河には、その異人視を百倍も強く感受してオドオドと孤絶しているような住民たちの悲しさが至るところに沁みついているように感じられたのである。

(略)

その浦上に原子バクダンが落ちたと知った時には、私はまったくアツと思つたまま、しばしは考えることが途切れてしまいましたよ。しかも浦上の天主堂のすぐ真上ちかくでバクハツしたというのですから、運命のイタズラにしても全く二の句がつけなかったのは当然でしたらう。

日本の地上に住んではいても彼らの天は日本の天ではないのだという異教徒の白眼視が百倍も強く彼らの身に感受されていたはずでした。私はその悲しさを浦上の人家や山河や樹木や畑の物にまで感じたのだもの。人の白眼視を百倍も強く感じているということは、それが彼らの意志や本心ではなくとも、彼らが自然に日本の空よりも、よその空の中に、自分の空を見るような現実が生まれるに至るだらうということ

を、私がいつからか確信するようになっていたとしてもフシギではありますまい。人が疑るように、自分が似てくるね。人は弱く悲しいものですよ。

彼らが自分の空だと思ってみたりしたこともある空の中から飛んできた飛行機が、彼らの天主堂の上で原子爆弾を落とした。私が最初の一瞬に考えたのは、そういうことでした。

それは私の思い違い、思い過しであるかも知れませんが、しかし、私が最初の一瞬にハッと思ったことは、とにかく、そういうことだったのです。そしてその原子バクダンが私の頭上にも落ちたのか、否、その原子バクダンを落とした奴が私自身だったのか、何がなんだかわからないような、奇妙キテレツな気持ちでしたよ。

坂口安吾は、昭和十六年に見た浦上の風景に、特別な期待と感慨とを持ったと語っているが、それは、浦上の風景を、彼の内面の風景と相似形なものとして受け取っていたからであろう。疎外された者が青空の下でしばしの安息を得る（得ようとする）というのは、彼が時に採用する構図である。例えば、『吹雪物語』しかり、『石の思い』しかり。それは、絶望の中で、明日へと生をつなぐために希望と理想を投影する、最後のプロジェクトないし映画紙のようなものであったといえよう。

しかし、この『長崎チャンポン』の記述から考えるに、この青空の下での安息という構図に対して、原子爆弾の浦上への投下という知らせは、破壊的に働いたのだといつてよいように思う。

安息を与えるはずの青空から、破壊の源が降ってくるというのである。また、自分は破壊する者であると同時に、その破壊をも

たらず者でもあるというのである。

ここにおいては、世界を中心において構成するはずのものが中心において破壊するものへと逆転し、また、自己も（少なくとも加害者が被害者という分別によつては）その像を確定することが不可能となつている。これは、ひとつの個人の内面の世界の終わり、崩壊である。

坂口安吾は、この崩壊の構図そのままを、自身の「身」という語や「骨」「血肉」といつたそれに関連する言葉に置き換えて語つていくことによつて、引き受けていこうとしているように見える。

告白による救済を否定している『文芸時評』（昭和二一・七・三）（四）は次のように言う。

問題は破局に身を沈めることが大切なので、告白を行ふことではない。我がみにくき汚さをさらけだしてみせること、破局に身を沈めること、は本来異なるものであり、また、破局に身を沈めることは作品自体破綻することを意味するものではない。

また、
我々は常住破局に身を沈め、告白に代へるに、芸術による自我と知性の古典的な復活を以て魂の告白をなすべきではないか。

と言つて、破局に沈んだ身の、というよりは、崩壊そのものである（身体）から、未来への何らかの展望を産み出そう、と言うのである。そしてこの（身体）に接続された展望を「魂」と名付けることによつて、魂を、そして希望を、形而下のものとして再構

成しているのである。

この崩壊としての（身体）の問題は、坂口安吾の場合、主に、男女の恋愛的問題に仮託されて、取り組まれて（『書かれて』生きられて）いるといつてよいように思われる。自分が執筆していく上で、どうしても醜く汚してしまう女を、どうしても美しく描きたいというほぼ不可能に思われるような取り組み（これもひとつの「愛」のかたちといつてもよからうか）として（こうしたことの本注としては、つとに有名な『戯作者文学論—平野謙へ・手紙に代へて—』（初出『近代文学』昭和二一・九）をあげることができよう）。

このように、坂口安吾にとって原子爆弾の投下は、というよりも「浦上」へ「原子バクダン」が落ちたという知らせは、大きな事件・出来事なのであったといつてよいであろう。それは、当時彼が暫定的に保持していた自己救済の構図（青空の下での再会と安息への希望）をいったん無効にしたのみならず、その構図を破壊してしまう要素を自分自身が保持しているということをも、なかば暴力的に自覚させたのであった。これはちょうど、彼が『文学のふるさと』（初出『現代文学』昭和一六・七）において行ったこと—（殺害）への自身の関与性を密やかにしめやかに隠匿すること—の逆であるといつてよい（詳しくは、拙論『坂口安吾『文学のふるさと』試論—「何か、氷を抱きしめたやうな、切ない悲しさ、美しさ」の由来と行方を出発点に—』（『九大日文01』平成一四・七）参照）。そして彼は、こうした崩壊の構図全体を、身体に關係する語で語ることによつて、行為遂行的に自分の（身体）となし、この問題系からの不転の構えをとつたのだといつてよいだろう。これが彼の自己救済への新たな取り組みであり、また同時に、

文学者としての責任の取り方であったのだといつてよいであろう。

しかし、この（身体）は、いうまでもなく、破滅的である。いまここで、「志向されるものであると同時に、志向するものでもある」という現象学における身体の定義を、少々の無理を感じつつあえて借用していえば、この（身体）にとつて志向とは、初めから、破壊のことではかありえないからである。ここには、ある主体にとつて、絶対的な嫌悪の対象であると同時に、もしよりよく生きようとするのであれば、絶対的に捨て去ることの不可能なものが誕生している。自らの求める者を必ず殺してしまう装置としての（身体）と、求めていたのだという限りにおいて必ず生じる悲しみとが。

もしよりよく生きようとするのが、自身の持てる可能性のより多き発現へ向けての運動であるのだとすれば、人は悲しみを捨て去ることはできない。なぜならば悲しみは、潰えられた可能性の形だからである。ここにおいて「魂」とは、ほぼ悲しみの謂いであるかのごとくである。そしてこの「魂の声」に立脚した文学を、この時期の坂口安吾は最大級に賞賛する。以下は、『戯作者文学論』においてその執筆が触れられている『蟹の泡』（初出『雑談』昭和二一・九）からの引用である。

あいにく私は手もとに「春日」がなく、一つも記憶してゐないので、まともにこの芸術を論ずることができないけれども、これは俳句など、いふケチなものではなく、文学であり、人間の魂の声である。一人の人間の全部のもの、精神も肉体も魂も血も毒も涙もみんなあげて花となり、ふるさと呼び

かかられた声であり、俳句など、いふ閑人の閑文字ではない。自然観照など、いふものを私は文学だと思わないので、とみゑさんの先生に当る宗匠方の十七文字を私はたゞ無駄な文字だと思つてゐるに過ぎないのだが、このお弟子さんは根底的に文学の質が違つてをり、一字一字が人間の切なさ格闘に根ざしてをり、美しく、凄惨で、絶唱といふ感がする。先生の宗匠方のほめ方では足りないのです、これは俳句ではなく、人間、文学、といふ立場からとりあげる必要があります、昭和の文学史に逸してはならぬ作品だと思つてゐるのだ。

原子爆弾としての（身体）は、そのような悲しみ（せつなき）を保持し続ける装置であるという点において、（健全）であると言つてよい。この（健全さ）は、「魂」の存在を保障するという言い方をすれば、宗教的言説と同等に健全であるが、しかしこの（魂）は悲しみをつつむオブラートではなく悲しみそのものであるという点に大きな相違がある。

このように考えると、（形而上的）宗教的言説は、（健全さ）の源である悲しみを隠蔽してしまう可能性を持つという意味で、まったく不健全なものであるということになる。が、しかしだからといって、（形而上的）宗教的言説の存在そのものを全否定してしまうことは出来ないであろう。なぜならば、まず、いうまでもないことではあるが、悲しみは、人を行動不能にさせ、向上への意欲を根こそぎ失わせ、そして死へと向かわせることがあるからである。そうなつては元も子もない。

またここで、いまひとつ注目しておきたいのは、それが形而上学的な趣を持つとはいへ（つまり、身体よりも精神を上位に置くと

いうヒエラルキーを持ち、またそのヒエラルキーが「魂」という語によつて強化されている、とはいへ）、身体と精神の間にある領域としての概念装置（つまり「魂」という語）をとにもかくにも持つていたという事実である。坂口安吾の言説は、形而上的宗教的言説を再構築（解体―構築）したものであると言えるであろうが、しかし、この「魂」という概念装置がなければ、精神と身体とはその「分裂」を嘆くばかりで（あるいは、嘆くこともなく）、ことは初めから始まり得なかつたであろうから、もしくは始めるにもそれ相応の困難を強いられたであろうからである。

このような意味で私は、坂口安吾の言説の、形而上学に対するカウンターとしての側面のみを強調するような行為を慎みたいと思う。それよりも、この言説が構成されるプロセスにおける言葉の機能について、着目しておきたい。「魂」という語が、形而上的にも形而下的にも、それぞれの中心において使用可能であるということが重要なであろうと思う。そして、形而上的形而下的、両方の言説が構成要素となつたそれ以降の言説空間においては、「魂」という語においては、それが（悲しみ―潰えられた可能性）の表現者であるのか隠蔽者であるのかが決定不可能な代補としての性質が、より強くなつた、ということになる。

ここで、あえて戯画化してみれば、形而上的宗教的言説とは（悲しみ―潰えられた可能性）を覆う防音壁であり、坂口安吾のそれは絶えず悲鳴を再生産し続ける楽器だ。このどちらが上等等かなどということには、なかなか判断がつけられるものではない。どちらの側についても、ついたその途端に、相手に対してのみ通用する強さを競う不毛なゲームが始まつてしまひそうである。

しかしそのように対立的な面を持つのではあるが、両者ともに、
〈悲しみ〉を扱おうとはしている点において、ともに誠実なのだ
と思われる。

太宰治の死を扱った『不良少年とキリスト』（初出『新潮』昭和
二二・六）の結末には、なぜか「原子バクダン」が登場している。

然し、生きていると、疲れるね。かく言う私も、時に無に
帰そうと思う時があるですよ。戦いぬく、言うは易く、疲
れるね。然し、度胸は、決めている。是が非でも、生きる時
間を生きぬくよ。そして、戦うよ。決して、負けぬ。負けぬ
とは、戦う、ということですよ。それ以外に、勝負など、あり
やせぬ。戦つていれば、負けられないのです。決して勝てないの
です。人間は、決して、勝ちません。たゞ、負けられないのだ。

勝とうなんて、思っちゃ、いけない。勝てる筈が、ないじゃ
ないか。誰に、何者に、勝つつもりなんだ。

時間というものを、無限と見ては、いけないのである。そ
んな大ゲサな、子供の夢みたいなことを、本気に考えてはい
けない。時間というものは、自分が生まれてから、死ぬまで
の間ですよ。

大ゲサすぎたのだ。限度。学問とは、限度の発見にあるの
だよ。大ゲサなのは、子供の夢想で、学問じゃないのです。

原子バクダンを発見するのは、学問じゃないのです。子供
の遊びです、これをコントロールし、適度にご利用し、戦争な
どせず、平和は秩序を考え、そういう限度を発見するのが、
学問なんです。

自殺は、学問じゃないよ。子供の遊びです。はじめから、
まず、限度を知っていることが、必要なのだ。

私はこの戦争のおかげで、原子バクダンは学問じゃない、
子供の遊びは学問じゃない、戦争も学問じゃない、というこ
とを教えられた。大ゲサなものを、買いかぶっていたのだ。

学問は、限度の発見だ。私はそのために戦う。

ここには、太宰の死に触発された、坂口安吾自身の死との戦い
が表れていると考えることもできる。

「原子バクダン」としての自身の〈身体〉など、悲鳴発生装置
としての〈身体〉など殺したくなつて当然、健全であろう。

しかし、それが捨て去ることが出来ないのであれば（これが自
分のカラダなんだと思いを決めてしまったのだから）、悲鳴が消えて
しまわない程度に、限度を知つてそれを制御するほかはない。と、
原子力（科学）を語る言説とアナロジカルに、彼の〈身体〉
学は語られていくこととなる。

文学とは人間の如何に生くべきかといふ孤独の曠野の遍歴
の果実であり、この崖に立つ悪の華だが、悪自体ではない。

私は悪人だから、悪事が厭だ。悪い自分が厭で厭でたまら
ないのだ。ナマの私が厭で不潔で汚くてけがらわしくて泣き
たいのだ。私はできるなら自分をズタクに引き裂いてやりた
い。そしてもし縫ひ直せるものならすこしでもましなやうに
縫ひ直したい。

これは『蟹の泡』からの引用であるが、坂口安吾にとつては、
彼の〈身体〉を制御・変換し得るメタな構造（新しい〈身体〉の
製作が念願されていたということになる。目を覆いたくなる現

実を直視し、そこから新たな生を紡ぎ出そうという、病んではいるが健全で誠実な科学精神Ⅱ身体の誕生である（いまここでは、悲鳴が先であったのか、それとも新しく見栄えのする（身体）への欲望が先であったのか、その起源については、問わずにおく）。ここにおいて「魂」という精神と身体の間領域は、認識に先立つてアプリアリに存在するものではなく、探し求められる限りに存在するという、経験的に経験出来るはずもないが、しかしそれでも経験的に経験したいと願われるというところの、作業仮説的構造物となったのである。「いくら幻滅にぶつかっても懲りるということを知らないロマンチスト」「センチメンタリスト」（福田恆存『解説』（「白痴」新潮文庫 昭和二三・一二）の誕生である。

このように、原子爆弾と、自己と世界とを解釈・認識する装置としての（身体）とを交雑する語りを経た後で、原子爆弾自体は、次のように語られることになる。以下は『戦争論』（初出『人間喜劇』昭和二三・一〇）よりの引用である。

すべて、物事には、限度というものがある。時速三百キロをだしうる自動車も、東京都内に於ては、三〇キロでしか走ることを許されない。人は誰しも殺人の能力があるが、故なき殺人は許されない。各々のエネルギーには使用の限界があり、いわば、この限度の発見が文化とか文明というものであって、エネルギーの発見自体は、直接それが文化や文明とよばれるべきものではないのである。

原子エネルギーとても、同じことで、その使用の限度が発見、確定せられて、はじめて文化の一員となりうるにすぎない。

今日に至るまで、ただひとり戦争のみが、この限界をハミダス特権を専有し、人間はそのエネルギーの総量をあげて人を殺すことを許され、原子エネルギーもその全量の最も有効なるバクハツ力を発揮することを許され、祈られることができた。

戦争とても同じことで、一九四五年八月六日のバクダン以前の各種の兵器のエネルギーは、まだしも、その被害よりも、利益の方が、人類の歴史的立場に於ては、大であつたと私は思う。

（略）

まず大体に於て、人間の空想も、一九四五年八月六日のバクダン以前までは、科学とトコトンマのところまで、行つていた。

我々の祖先の無限の想像力といえども、その魔力、神通力、忍術のすべてをあげて、八月六日のバクダンを夢みてはいないのである。夢みることができなかったのだ。このバクダンに至つて、そのエネルギーは、ついに空想をハミダシ、空想の限界を超えてしまったのである。

筑紫なる梅のオトドが雷となつて落ちたところで、せいぜい千ポンドバクダンぐらいのことだろう。筑紫一國、山の狸も、池のミミズに至るまで、ピカドンという一瞬に焼けてなくなるなど、は、誰一人、夢想することも出来なかつた。

空想の限界を超えるに至つては、これはもはや人間のものではなく、まさしく悪魔の兇器である。そのもたらす被害は、当然利益よりも甚大であり、今日まで戦争がもたらした

効能も、この悪魔のバクダン以後は、ついに被害を上廻ることとは出来ないであろう。

(略)

兵器の魔力が空想の限界を越すに至って、ついに戦争も、その限界に達したと見なければならぬ。

兵器の魔力、こゝに至る。もはや、戦争をやってはならぬ。断々乎として、否、絶対に、もはや、戦争はやるべきではない。

今まで戦争が我々にもたらした利益は、そして、今後も戦争が我々にもたらすと予想しうる利益は、これを戦争以外の方法に委譲する方策を立てねばならない。

戦争が我々にもたらしたものは何か。文明の発達、文化の交流、そして、それが今後に於ては、世界単一国家となり、それが戦争の最後の収穫となるべき筈であつたであろう。

然し、もはや、ここに至つて我々は、戦争の力に頼つてその収穫を待つことは許されない。他の平和的方法によつて、そして長い時間を期して、徐々に、然し、正確に、その実現に進む以外に方策はない筈なのだ。なぜなら、兵器の魔力、ついに空想を越すに至つたからである。

ここに書かれている事態、つまり、「兵器の魔力が空想の限界を越す」という事態は、既に今現在の私たちには関係のないことのようにも思われる。なぜならば私たちは、例えば無数のキノコ雲で地球を覆わせるという「空想」をも手にしているからである。

しかしながら私は、坂口安吾が「兵器の魔力」を提出する地点というの、そのような、各種兵器の具体的な威力の大きさだけを

云々するような場所ではないのだと考えておいた方が生産的なのだと思う。

私たちは既に、例えば、全域に多数のキノコ雲が立ち上つている地球の視覚的なイメージを思い浮かべることが出来る。ここでは、「空想」される客体は死に、主体は生き残っている。しかし、いうまでもないことだが、もし実際にそのような事態になれば、私たちはそのような光景を見ることはできない。なぜならば、誰もが死んでいるからである。ここでは既に客体も主体も存在しないのだ。また、第十一回原爆文学研究会において中野和典氏が発表されていたことでもあるが(題目「核シェルター」という文学空間)、たとえシェルターで生き残つたところで、生存可能な(あるいは生を継続するに値する)世界は、既に存在しないのである。

坂口安吾がその身に引き受けた(殺す主体であると同時に殺される客体でもある身体)という装置は、このような存在の消失(「死」)の問題を前景化させる。(「死」についての「空想」ではなく、「空想」すること自体が不可能になるような条件、「空想」の(「死」)についての問題である。

「国破れて山河あり」という詩があるが、しかし、「兵器の魔力」はそのような(戦後)の抒情が存在し得ないという事態を私たちに突きつけるのだ、と考えておきたい。

「国破れて山河なし」、「兵器の魔力」登場以後の詩はこう書かれてしかるべきであろう。「しかし、それでは、詩にならない」というむきもあろう。その通りであるようにも思われたりする。かほどに文学とは、戦争(「死」)の否認だ。

(しかし、このように語る本稿にも、「死」に対する否認が働いている

可能性がある。身体の死に対する否認である。)

『長崎チャンボン』は、このような、自己救済への、そして同時に責任^{responsibility}に応答可能性への行為遂行的な「賭け」としての、(身体)の原子爆弾化の時期を回想し得る時点・地点において書かれているのであった。ここには、もう一つ別種の(空)が登場している。

私は今回、長崎へ行き、浦上の原子バクダンのバクハツ中心地から、浦上の天主堂の廃墟へと登りました。天主堂の丘は庄屋の屋敷跡だそうですね。この庄屋は浦上切支丹の召捕や吟味には先に立って手伝い、踏絵をやらせ、流罪を申渡したりしたのもこの丘の上の庄屋の屋敷でやったことだそうですね。

浦上切支丹はその悲しみの丘を買いとって天主堂をたて、彼らの聖地としたのですが、それがさらに天地の終りとも見まごうような悲しみの丘に還ろうとは。

(略)

浦上天主堂の丘から四方を見ますと、小さな家がマンベンをなく建ってはいますが、どの家の周囲にも目立つのは樹木のない空地の広さばかりですよ。それは一見して旅人の心を重く暗くさせますね。

しかし、私はその丘の上に立ちつつあるうちに、私の心がだんだん明るくなるのに気が付きました。それはね。十年前には甚しく異境のような感じがした浦上の山河が、生き残りの樹木もなく冷たい土の肌を寒々と露出しながら、今度はバ

カバカしいぐらい親しみのあるなつかしいものに感じられたのですよ。

「もう、誰も、クロと云う人はいないだろう」

クロという言葉を私に教えたり、その意味を云つてきかせたりした男の顔も女の顔も思い出す必要すらもないことだ。

すぎた悲しみというものは問題にする必要がないものだね。ここに一つの新しい暖かいものが天から降って住みついているよ。もう誰もクロなんて言葉を云う必要がないし、そんな言葉の存在すら、なくなつたなア。悲しみは、すでに、つくなわれているよ。そして、この丘の上の空は誰の空でもなくて、実に明るい空だなア。

浦上は、もう明るいし、もう暗くならないのだな。

私が浦上の天主堂の丘の上で発見した新しい地図はそれだけでしたよ。

ここで彼が確認しているのは、四囲の自然と、今に生きている自分の身体と、いつの間にか落ち着きを取り戻している自分の内面の風景のみであつて、浦上での死者の悲しみを問題にしている訳ではないように、まずは、読める。

ここにおいて身体は、(青空の下での快適な今の時)との接続を取り戻している。

崩壊としての(身体―空)とは無縁なオルタナティブとしての身体と空の登場。

こうした言説の功罪というものは、よく吟味しなければならぬであろう。問題を問い続けようとしているのか、それとも、不問に付そうとしているのかという点において。

しかし、いまとりあえず確認しておきたいのは、彼において救い（休息）は、彼の文学の閉鎖系（身体―空）の中からは現れなかつたことである。そしてこのこともまた、私には健全なことであろうと思われるし、坂口安吾『長崎チャンポン』自体も、そうした評価に賛同してくれるであろうと思う。『長崎チャンポン』は、以下のように閉じられている。

しかし、この街の胃袋、だけは――しかし、痛快でもあるなア。一日三合の配給に神を売らざるを得なかつた胃袋というものは、考えれば考えるほど、決して人の心を暗くさせるものではないなア。

要するに、胃袋の欲する量を欠かしてはならないということとは、平和の根本条件なんだね。長崎と浦上の胃袋は、けだし平和の根本条件の化身の如きオモムキがあるのさ。チャンポンのカナダライがひとまわり小さくなる時は、まさに長崎滅亡の時であろう。

坂口安吾の言説と永井隆の言説は、〈潰えられた可能性〉を軸にして、対称な位置にあるように思われる。そして両者の言説は競い合う関係にあつて、前者は後者に対して衝迫力を持つ。なぜならば、前者は無垢に生きようとする者たち（自らを単に被害者として同定する者たち、あるいは、〈被害―加害〉の関係からは無関係であるかのように振る舞う者たち）を殺しつづつ、その悲しみを回収しようとする装置だからである。しかし坂口安吾は、その衝迫力を、後者にナマのままぶつけることはしなかつた。『長崎チャンポン』の発表は、永井隆の死後だったのである。

ここに、〈自らの救済の方法によつて、他人の救済の方法を壊してはならない〉という、救済に携わる人間のプライマリーな倫理を見ておくこともできようか。ちようど、坂口安吾が牧野信一のもとを静かに去つた時と同じように。

さて、さだまさしの『長崎B R E E Z E』（アルバム「自分症候群」所収。歌詞は「レコード・コピー・ギター弾き語り さだまさし全曲集」（ドレミ楽譜出版社 昭和六二・一一）に拠つた。改行等は引用者）は（他の曲と比べてとりたてて、という訳ではないが）、美しい曲である。

路面電車の窓から

思い出が風のように おだやかに吹いてくる

海風を孕んだ あじさい色の空

君を愛して過ごした この町

停車場を幾つか数えて やがてゆるやかなカーブ

かすかに車輪が軋んで

気づかぬうちにポイントを乗り換えていた

あの時もあとで乗り違えたことに気付いた

長崎B R E E Z E 優しすぎる風が

長崎B R E E Z E あの日も吹いていた

沖をゆく船の窓のきらめきに 軽いめまいを感じ

最後の言葉を ききとれなかつた

待たせるのはいつでも僕で

南山手坂の途中 赤煉瓦の小さな店

ステンドグラスの窓辺で 君はいつも微笑んだ

来ると信じた人を守つたら辛いかわ

お互いの愛の形が

本当は初めから少しだけ違つていたんだろう

丁度子供がシャツの釦の ひとつめを違えて

最後になつて気づくようにね

長崎 B R E E Z E 待ち疲れるなんて

長崎 B R E E Z E 思いもしなかつた

喜びと悲しみは隣りあわせ 愛と憎しみは背中あわせ

そんなことにも気づかずにはいたあの頃

長崎 B R E E Z E 過ぎ去つた季節は

長崎 B R E E Z E 全てが美しい

君に良く似た子供の手を引いた 君に良く似たひとと

坂道で今すれ違つた

長崎 B R E E Z E 優しすぎる風が

長崎 B R E E Z E あの日も吹いていた

傷を癒すのも「風」の「優しさ」、悔いと内省を可能にするの

も「風」の「優しさ」、そして、道を誤らせたのも「風」の「優

しさ」。

喜ぶことになるのか悲しむことになるのかというのは、最後の最後の結果によつて判明するのであつて、そこに至るまでの努力の過程の最中には、そうした結果がどちらに転ぶのかはなかなかわからない。それに悲しみは、それが反転せられることで、喜びの形を示す。また、愛と憎しみは、共に、断ち切ろうにもなかなか断ち切れない強い関心であるという点で、変わりはない。

というように、いくら事後的に思惟を巡らせてみても、過ぎ去

り捨て去つたものには二度と手は届かない。過程といい関心とい

い、それらは過去という時のかなたにあるからというだけではな

く、耐え難い痛みとともに、「風」の向こう側にあるからだ。

それならば「風」は不要なのかといえは、「風」の「優しさ」

無しには、思惟自体が始まらなかつたのだつた。

ならば、この過ぎた「優しさ」に、限度を設けることはできる

であろうか。確かに程度問題としては有効で、それもまた大事な

問題であるのだと思われる。しかし、根本的には、不可能なこと

であろう。

なぜならば、愛の挫折を、身を切るほどに痛まない愛は、愛で

はないからである。ゆえに、愛の挫折には、必ず耐え難い痛みと

「風」というオブラートとマフラーとが伴われることになる。

「優しすぎる風」もまた、誤認を生じさせるという点で危険だ

が、しかしそれなしでは主体が成り立たないような、代補である

のだといつてよいであろう。

ここで再度、限度の問題を考へてみれば、それは、「風」など

全部取つ払つてしまへ」という言動に対してということになる。

「人間は可憐であり脆弱であり、それ故愚かなものであるが、墮

ちぬくためには弱すぎる」(『墮落論』初出『新潮』昭和二一・四)

のであろうから。しかしまたその一方で、同時に、痛みに対する

耐性・強度への志向・鍛錬も、忘れてはいけないとも思うのであ

る。善人は気楽なもので、父母兄弟、人間共の虚しい義理や約

束の上に安眠し、社会制度といふものに全身を投げかけて平

然として死んで行く。だが墮落者は常にそこからハミだして、たゞ一人曠野を歩いて行くのである。悪徳はつまらぬものであるけれども、孤独という通路は神に通じる道であり、善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや、とはこの道だ。キリストが淫売婦にぬかずくのもこの曠野のひとり行く道に對してゞあり、この道だけが天国に通じてゐるのだ。何万何億の墮落者は常に天国に至り得ず、むなく地獄をひとりさまよふにしても、この道が天国に通じてゐるということに變りはない。（『統墮落論』初出『文学季刊』昭和二一・一二）

と、ここまで強弁しようとは思わないけれども（なぜって「孤独」がバクハツしていそうな氣もするから）、しかしながら、痛みは悲しみに伴うものであり、悲しみは、喜びのネガフィルムなのであるから。

喜びも悲しみも愛も憎しみもパンパンも女中さんもオカミサンも役人の方々も隠れキリシタンもカトリックもプロテスタントも仏教徒もなんにもかんにも、青空の下へ——

公園のベンチで僕は 過ぎた愛の悲しさを数える
ひとり そんな午後

子供は ブランコの順番争い

所詮 僕の愛も それと同じ重みかしら

別れた人の横顔を 思い出せば いつも涙顔

Sunday Park

年老いた人が 菩提樹の葉陰で 居眠りしながら涙ぐむ

足下に 新聞紙

子供は ブランコにあきて

次の遊びに 駆け出したあとには 鳩が舞い立つ

晴れた午後には こんな密かな

悲しみ方があつてもいいだろう

Sunday Park

（さだまさし『Sunday Park』）

こんなたわごと、土砂降りの雨の中をかき分けかき分け、満面の笑みで（実は泣いているのかもしれない）、顔きながら、こちらへ向かつて駆け寄つてきてくれそうな（実は殴りつけに来るのかもしれない）、時にはそんな風にも私には思われたりすることもある先生に、この研究会は立ち上げていただいたのであつた。